

“アシと蹄を考える会” 第4弾! パートI —平成24年度第1回リム&フットケア・ワークショップ—

平成24年9月13日に開催された表題のワークショップについて、その内容を簡単に紹介します。今回は前半部分の話題です。

症例報告内容

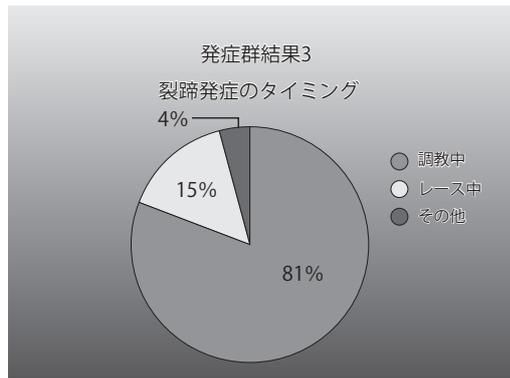
(1)「蹄側蹄冠裂の発症部位と要因に関する調査」

(JRA日高育成牧場 工藤有馬：装蹄師)

調査時期は2009年秋、対象はJRA栗東TC在厩馬で、蹄側蹄冠裂を発症した44頭(発症群)、過去に裂蹄を発症したことの無い108頭(非発症群)に対し、10個の調査項目について行った。発症群の発症肢は、左前が47%、右前45%で、そのほとんどが前肢であった。発症部位は、88%が内側～蹄踵にかけてであった。発症のタイミングは81%が調教中、レース中は15%であった。主な調教コースは、発症群、非発症群共に坂路が50%弱、ウッドが40%と差がなかった。敷料は、発症群の76%、非発症群70%がチップであった。蹄油は、発症群の55%、非発症群61%が液状蹄油、発症群39%、非発症群31%がクリーム状蹄油であった。また発症群の54%、非発症群の13%に追突や交突が見られたことから、追突や交突も発症の一要因となる可能性が考えられる。なお、裂蹄を発症して跛行した場合には、放牧や調教量を減らす処置が取られるが、跛行しない場合は調教が継続されることが多く、さらに裂蹄が悪化する可能性が指摘された。

【筆者コメント】

競走馬の裂蹄について、調査頭数が150頭にも及ぶ貴重な報告であったが、裂蹄の要因として、他にも不同蹄や狭窄蹄などとの関連性も考えられるので、それらとの因果関係や、さらには発症した場合の処置法についても、その成果を含めて調査すれば、臨床において、より実践的な指針となるであろう。



工藤有馬氏の説明スライド

(2)「裂蹄2症例への装蹄療法」

(北海道日高装蹄師会 倉持達矢：装蹄師)

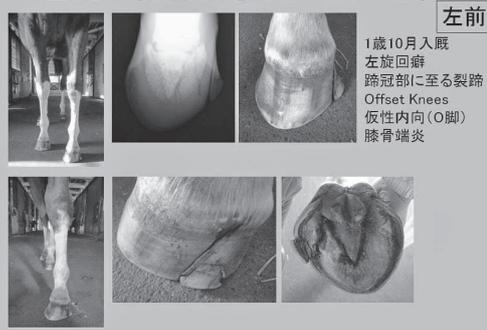
症例1の牡2歳馬は、左Offset Knee・仮性内向(O脚)・膝骨端炎・左旋回癖で、左前はかなりの肢軸異常がみられ、両前、左後は縦裂が蹄冠部にまで達していた。左前は肢曲がりのために外側への負荷が強く、外側の縦裂と蹄底の裂蹄も確認できた。裂部の刮削には、主に電動切削工具を使って、段階的に丁寧な削削したが、左後の外側裂蹄は最深15mm程度まで達しており、X線像から裂部の蹄骨は脱灰していた。装蹄は、左前の肢曲がりの矯正削蹄や蹄鉄修整を行う程度に止め、手入れ時には、蹄クリームを用いて蹄冠マッサージする様に指示した。日が経つにつれて蹄の生長により裂部は順調に下がり、調教も順調に進み、初診から8ヵ月後には北海道競馬に出走したものの左前の肢曲がりにより、その負荷が原因と思われる跛行を発症した。

症例2も牡2歳馬で、左前の蹄踵裂であった。蹄尖部が長い蹄であり、アンダーランヒールが認められ、調教時にはチャカつく気性難の馬であり、その際の捻じれなどが原因と思われる裂蹄であった。裂部は一見「かぎ裂き」の様にみえたが、刮削してみると深部は角細管方向の直線状亀裂であった。蹄鉄は、反回促進と蹄又への負重を考慮してリバーシブルとし、蹄踵部負面には空隙を設け、症例1同様に蹄冠部に蹄クリームを擦り込む様指示した。蹄冠部への進行はなく、順調に回復したため、2ヵ月程で通常の蹄鉄に戻し、現在、調教は進度を上げていると説明があった。

【筆者コメント】

経過の詳細が不明な部分も見受けられたが、開業装蹄師の弟子によるスライド14枚を使った丁寧な経過説明であり、質疑の時間帯には親方の助言もあり、判りやすくまとまっていた。今後も彼に続く、若手の症例報告を期待したい。

症例1・初回状態(12/1/16・2歳)



倉持達矢氏の説明スライド